

与謝野寛（鉄幹）の漢詩稿

小清水裕子

要旨

2021年に神奈川県川崎市の松本憲氏が発見した、与謝野寛（鉄幹）が堀口九萬一に宛てた昭和3年8月18日消印の封筒の中にあった漢詩稿二篇^①の作品について明らかにするとともに、この二篇の漢詩は与謝野寛の漢詩推敲課程を知る貴重な資料であることを示してゆく。

まずは、この二篇の漢詩を翻刻し、その内容を明らかにする。また、与謝野寛と堀口九萬一との関わりや、この漢詩が送られた昭和3年頃の与謝野寛の漢詩への意欲の高まりについて整理する。この漢詩の意欲の高まった背景として、昭和3年5月に満鉄の招待による満蒙への与謝野寛・晶子夫婦の旅、昭和5年に雑誌「明星」の後継となる「冬柏」の刊行などを論じる。

さらに、この二篇の漢詩は与謝野寛が漢詩の師と仰ぐ吉田増蔵（学軒）に同時期に送った漢詩作品とほぼ同作品であることから、推敲の見られる作品として貴重な資料であることを指摘する。

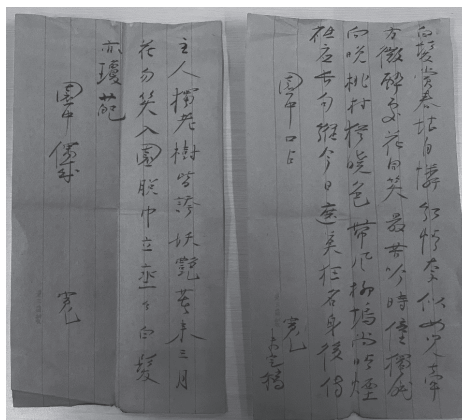
キーワード：与謝野寛（鉄幹）、堀口九萬一、吉田増蔵、漢詩、冬柏

一、与謝野寛の漢詩二篇

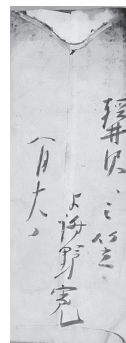
（一）来歴

まず、松本憲氏の発見した与謝野寛の漢詩二篇を次に提示する。

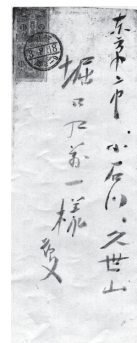
写真：①～③新資料 堀口九萬一宛与謝野寛漢詩二篇と封筒



写真①漢詩二篇



写真②封筒裏



写真③封筒表

（詩稿発見者松本憲氏提供、著者撮影2021年12月23日）

まず上掲の写真①の漢詩二篇が発見された経緯であるが、発見者の松本憲氏は、「以前より収集し所蔵していた封筒の中に「与謝野」と署名のある封筒があることは気になっていた。しかし、封筒の中身を取りわけ気にすることもなくしばらくそのままにしていた。しかし「与謝野」はあの与謝野鉄幹⁽²⁾ではないかと思い、封筒の中にあるものも、与謝野鉄幹の貴重な資料かもしれない気がついた。この封筒を入手した日付は正確には覚えてはいないが、特に封入物などの出し入れをしたことはない⁽³⁾。」従って、松本氏が入手した時点では堀口九萬一に宛てた与謝野寛の書簡はなく、漢詩の詩稿二篇のみであった。

上掲の写真①～③に示すように、和紙封筒の中に漢詩二篇は入っている。漢詩が書かれている用紙は明るいピンク色の罫線の入った便箋で、そこに毛筆で書かれている。

上掲の写真①の漢詩篇は、おそらく左側が一枚目、右側が二枚目となろう。寛署名が二篇ともなされているが、右側には署名の後に「未定稿」とある。この二篇が同じ封筒に二枚重なって入っていたことと、用いられている便箋が同じこと、筆の運びや墨の色も二篇とも大きな違いがないことなどから、二篇の漢詩を与謝野寛は揃って堀口九萬一に送ったものと考えたい。そして、同時に送ったものであるならば、「未定稿」と付記する場所は、二篇の漢詩作品の最終部であろう。

(二) 翻刻と解釈

従って、左側の七言絶句「園中偶成」、右側の七言律詩「園中口占」の順番で並べ、翻刻し解釈する。「園中偶成」

【翻刻】

主人獨老樹皆誇
妖艷着来三月花
勿笑入園脱中立
垂々白髮亦瓊葩
園中偶成 寛

【解釈】

主人ただ独りだけが年老いているけれど樹木は皆誇らしげだ
妖艶さを纏った三月の花が咲いている
どうか笑わないで下さい 春の園に入って中立ではなくなるのを
額からこぼれている白髪でさえも玉のような花となるのです
園中で偶々詠んだ漢詩 寛

「園中口占」

【翻刻】

白髮賞春茲向憐
紅情奈似女兒牽
方微醉處花同笑
最苦吟時僮獨眠
向晚桃村於暁色
帶風柳塢尚晴煙
祇應長句縱今日
遮莫狂名身後伝

園中口占 寛
未定稿

【解釈】

白髪頭（老人）は春を賞したり憐れんだりせずにはいられない
紅く色めくような情は女の子と一緒に
ほのかに酔っ払った所などは花がにこやかに笑うのと同じようだ
とても苦しんで詩を吟ずる時にはしもべは独り眠っている
夜になる頃には桃の咲く村はまるで暁の時のような色である
風を帯びた柳の堤の辺りには春霞がただよい
これをながめて長い詩を今日一日中歌いたい
狂ってしまった人として後世に私の名前が伝わっても まあそれはそれで…
園中で口ずさんだ 寛
未定稿

また、上掲の封筒（写真②・③）は、
・差出（封筒裏・写真②）

【翻刻】

軽井沢、三笠
与謝野寛
八月十八日

・宛先（封筒表・写真③）

【翻刻】

東京市、小石川、久世山
堀口九萬一様 御侍史

*切手は「壺銭五厘」が2枚

*消印は「軽井沢 昭和3年8月18日 午後6—9」

二、堀口九萬一と吉田増蔵

（一）堀口九萬一（長城）

与謝野寛と堀口九萬一の出会いは与謝野晶子と巡り会う以前のことで、出会った場所は韓国・京城であった。そのいきさつをここに紹介する。与謝野寛は明治25（1892）年に上京し、落合直文に師事し浅香社に参加した。寛は直文の弟の鮎貝槐園とも松島に漢詩の吟行に出かけるほど仲が良かった。その槐園が明治27（1894）年に渡韓し乙未義塾を経営し、寛も槐園の後を追ひ、翌年渡韓して義塾の教師となった。そして渡韓した槐園と寛が京城で身を寄せていたのは日本領事館であった。そこに領事官補として堀口九萬一が勤務していたのである。堀口九萬一（詩人の堀口大学の父）は帝大（東京大学）に主席で入学した秀才で、日本初の領事官試験に合格し赴任したのが京城だった。

若い才能にあふれた三人、寛・槐園・九萬一は意気投合した。特に九萬一と寛は以降、詩友（漢詩の友）として一生の付き合いをする。また寛は外交官の九萬一に強く憧れ、自分の子どもを外交官にする

ための教育に熱心だった。外交官になるには外国の言葉、特にフランス語と英語の教育は重要と考え、子どもの通う学校を決めたことが、長男・光によって明らかにされている⁽⁴⁾。やがて次男の秀が外交官となったことで、寛の願いは結実する。

このように、九萬一に寄せる憧れと信頼の友情の軌跡が表された寛の漢詩がある。「采花莊雑誌」（大正14年3月1日「明星」第六卷第三号）の二連目に、

新歡如醋旧歡醇
昨是今非五十春
遊俠誰憐漢陽客
如今斑白講書人

予与長城，始相識于朝鮮京城，実属三十年前事。

九萬一とは京城で出会った三十年来の友人で、若き日の九萬一のことを「遊俠」の人と賞している。ちなみにこの詩の題名の「采花莊」とは、与謝野家が関東大震災で被災し、東京郊外の荻窪に昭和2年に居を移した自宅を指している。荻窪ではこの「采花莊」と書斎の「遙青書屋」が当初建てられた。寛は書斎の「遙青書屋」を愛し、転居をきっかけに、「采花莊」と「遙青書屋」を題材にした漢詩作品を多く成している。そして昭和4年12月の晶子の五十の誕生祝として晶子の書斎「冬柏亭」が贈られ、「采花莊」と「遙青書屋」の間に建てられた。

さて、昭和3年1月から寛と九萬一は漢詩を唱和すること多数であった。そのことが、詩友で新詩社同人の新潟県在住の渡辺湖畔に宛てた3月2日の書簡に書かれている。

春來堀口大学君の父君と唱和致すこと双方にて百篇を越え申候。また慶応の漢文の先生研堂君とも屢次韻を交換致しをり候。一括して吉田先生の大斧を乞ひ可申候⁽⁵⁾。

そしてこの書簡に名の挙げられている吉田先生とは吉田増蔵（学軒）のことである。

（二）吉田増蔵（学軒）

まず吉田増蔵は「昭和」の元号の考案者として知られている漢学者である。増蔵は森鷗外が図書寮で元号の研究の際に、鷗外が招いた漢学者であった。鷗外は大正11年7月に9日に没するが、その遺言に、自身の所蔵する漢籍を増蔵に託し、志半ばとなってしまった「元号考」を増蔵に引き継いだのだ。いかに鷗外が漢学の学者として増蔵に厚い信頼を寄せていたかが理解できる。寛は上京して落合直文に師事し、直文から鷗外を師とすべきであると勧められ、紹介された。寛は鷗外を師と仰いでいたし、鷗外もまた寛の才能を評価していた。当然、増蔵は鷗外から寛の名は聞き及んでいたし、増蔵は寛の文芸を通して寛のことは知っていた。しかし増蔵と寛の直接の初の対面は鷗外の葬儀の時であった。大正15年10月「明星」9巻3号に寛は「遙晴書屋雑誌」と題して数篇の漢詩を発表している。その中に吉田増蔵に贈する詩が二篇ある。

呈吉田学軒先生

百家凋落後	夫子獨能振
超俗識兼德	立誠詩有神
道探九經典	学葆六書真
相識廿年晚	五十欲問津

五疊韻呈吉田先生併似諸友

良師兼益友	相識世攸無
交頼諸君素	詩煩夫子朱
苦吟冊年瘦	末学一生迂
猶作童兒問	同人憐我愚

いずれの詩も、増蔵が現在では秀でた詩人であり、漢学者であることを賞し、知り合うことが二十年遅かったことを嘆いている。また、増蔵から朱筆を、添削を受けていることがはっきりと示されている。

これは鷗外没後まもなく編纂が開始された『鷗外全集』編纂にあたり二人は親しくなったことを示しているのである。その経緯が寛の没後に刊行された『与謝野寛遺稿歌集』（昭和10年 明治書院）の「序」に増蔵によって述べられている。世間一般では短歌で名を馳せている寛であるが、その最後の歌集の「序」が、漢学者で漢詩人の増蔵によって識されている意味を考えると、寛の漢詩に対する深い思い入れが示されていると理解できる。

さて、増蔵に対して寛が漢詩の添削を願ひ出たことは、昭和4年8月17日の吉田増蔵に宛てた寛の書簡にも明らかである。

このたびハ、御繁忙の中より悪詩を御覧下され、精細に御斧正をたまはり候こと忝く奉存候。一々御加朱の跡を拝して點頭仕り候。

早速御礼状を呈すべきに候処、末女が熱を出だし候 「食畢園中歩、露源不可之」の句を「食畢園中歩、吟履泥似亀」と改め候てハ如何にや。円き形の庭下駄の積りに御坐候⁶⁾。

と吉田増蔵による漢詩の添削御礼が述べられている。また、8月23日の書簡では

其中一度拝趨仕度と存じ候⁷⁾

やはり面会して指導を仰ぐことが良いと判断したのか、寛が増蔵に面会を求めているのである。

また、昭和3年5月に、与謝野夫妻は満鉄の招きを受け、満州と蒙古の旅に出た。その与謝野夫妻の旅行記をまとめた『満蒙遊記』（昭和5年5月 大阪屋號書店）には晶子と寛の短歌と紀行文と、寛の「満蒙游草」と題する一連の漢詩が収められている。巻頭の「満蒙遊記の初めに」において寛は増蔵に謝辞を述べている。

自分の漢詩は短歌よりも更に蕪雑なものばかりである。感興は絶えず生じたが、詩に纏める余裕がなかった。是れは恩師吉田増蔵先生の一聞を乞ひ、その大政を辱くことが出来た。

つまり、満蒙の旅行から帰った昭和3年6月から『満蒙遊記』刊行の昭和5年5月までの期間に、堀口九萬一と唱和した漢詩のほかにも、増蔵は寛の漢詩の添削を行っていたことになるのだ。

さて近年、寛が増蔵に送った漢詩稿一二四篇が吉田家で発見された。その漢詩稿を濱久雄が翻刻し訓読・語釈・通釈を施した⁸⁾。書中の写真から、半紙に毛筆で書かれた詩稿が糸で綴じられている。この発見により、具体的に寛がどのような漢詩を詠んだのかが初めてわかったのである。

(三) 漢詩に表れた堀口九萬一への想い

上述の吉田家から発見された寛の漢詩稿の冒頭は堀口九萬一に寄せた無題の詩九篇である。

昭和三年一月，長城堀口九萬一君，有寄懷詩。唱和，亘三月而疊韻，至数十篇。

近日城仲士	作詩君独清
秀兼千嶂色	雄奪百川声
好句參差出	奇思錯落生
菲才維不敵	唱和学吾兄

君詩何自在	疊韻百篇清
下学皆奇意	立言都正声
波紋風後起	雲錦日辺生
詞界銷沈久	挽回唯有兄

昭和三年一月，三月に及んで，寛と九萬一の間で漢詩が唱和されたものが数十篇あるということが先ず示されている。これは既に述べた，寛が渡辺湖畔に宛てた昭和3年3月の書簡に「春来堀口大学君の父君と唱和致すこと双方にて百篇を越え申候」と同様である。

これに引き続いて九萬一の素晴らしさを表した詩が九篇連なる。上記は冒頭二篇を引いた。

詩の内容は最近の詩人の中では，ただ九萬一だけが清らかな詩を成していると賞賛している。また，最近では沈みがちな詞界の挽回ができるのは九萬一だけだと，頼りにする気持ちが表れている。

そしてこの九篇の連作に続けて「書懷」，「寄長城兄」，「喜長城君終北越遊説帰郷」と九萬一を詩友の兄と慕う寛の想いがあふれている詩が続いている。以降も頻繁に九萬一を想った詩が続く。

三、漢詩推敲の足跡

松本氏によって発見された与謝野寛の漢詩二篇は，吉田増蔵に宛てた漢詩，一二四篇の中に見られる。つまり，昭和3年に堀口九萬一と唱和した漢詩の添削を，唱和した相手である九萬一にも求めたことになる。そうであるならば，九萬一にとっては寛と唱和した漢詩であるのだから，既知の漢詩となる。そして，松本氏は二篇の詩を発見したわけだが，九萬一は増蔵と同じだけの漢詩作品の添削のボリュームが実際にはあったと考えられる。どういったいきさつかはわからないが，吉田家から発見された一二四篇の漢詩はまとまった状態で，しかも先述の濱久雄氏の調査によると四作品しか増蔵の朱筆が入っていないという。しかし，寛の増蔵への昭和4年8月の書簡では，推敲に必要とする詩のみを書き送っていることから，寛と増蔵は詩の添削を百二十四篇ひと息に，一度に行っていたとは考え辛い。また，吉田家には四篇のみが添削された形で残り，あとの百二十篇は手つかずであることは，この時期，刊行予定の『満蒙遊記』のなかの寛の漢詩作品「満蒙遊草」の添削が優先されたのではないだろうか。

まず，七言絶句「園中偶成」は，増蔵に送ったものでは73番目「春日雜詠 九首 廿八韻」という連作の最終部81番目に当たっている。連作の中の最終という位置づけでこの詩を解する場合と，単独で解する場合とではやはり趣が変わってくる。連作は梅花から杏花，そして桜と，春の美しい景色の移り変わりを描きながら，老境になり益々美しい春を楽しむ気持ちを表している。最後の当該の詩になるが，その結果，白髪でさえも美しいものとして描いている描写が冴えることになる。作者の編纂の意図が働いての連作とすれば，やはり，松本氏の発見した「園中偶成」は連作として味わいたい詩となる。

葵蕾桃桜紅僅加	柳枝短小未能斜	木蓮一樹高於屋	独占園中梅後花
時不待人過益加	老来類似陰厓斜	春風二十四番速	未忘梅花既杏花
紅尽園中興卻加	出門不厭雨糸斜	貪春情与痴人似	更訪隣家未落花

哀意自生工不加	暮春人感暮年斜	世間才子多情語	孰与衰翁賦落花
釘釘百篇愚自知	古人糟粕没他奇	春來何事漫把筆	花下消閑莫若詩
今晚桜開温遽加	黄昏既見雨糸斜	世情不啻須更改	一笑乍成含淚花
遊春興趣老來加	林下停筇孤影斜	所愛不同少年日	最含情是夕陽花
郊外幽間向晚加	深深曲巷徑橫斜	近聞人語不看屋	戸戸灯光総隔花
主人独老樹皆誇	妖艷着來三月花	莫怪入園脱中立	垂垂白髮亦瓊葩

九萬一に宛てた漢詩では転句「莫怪入園脱中立」は「勿笑入園脱中立」となっている。「勿笑」の方が、承句の「妖艷」の語が軽やかに響く効果がある。

次に、九萬一に送った「園中口占」は、増蔵に送ったものでは60番目「鎌倉冬柏山房小集呈主人二首」という題で、連作の二連目の一篇となっている。

「冬柏山房」とは神奈川県鎌倉の内山英保の山荘のことで、冬柏山房と言う名は寛が付けたものだ。そしてこの漢詩の詠まれた時と同じくして、山荘は建てられた。寛や晶子はもちろん、新詩社の門人並びに文化人・経済人がこの山荘（サロン）に集った⁹⁾。また、この山荘の名にあやかって、昭和4年12月の与謝野晶子五十の賀では、与謝野家の敷地に「冬柏亭」という名の晶子の書斎が記念に贈られた。そして新詩社の雑誌「明星」の後継誌として「冬柏」は昭和5年に横浜短歌会を中心にして発刊される。また、詩の題名の「主人」とは内山英保を指す。内山英保は横浜本牧の「三溪園」の原三溪の下から独立した実業家であり、寛と晶子の新詩社の門人でもあった。

詩は、冬柏（椿）の花が咲く「冬柏山房」を訪ね、山房の主人みずからのもてなしを受けて楽しい詩宴が夜まで続く様子が描かれている。冬柏に加え、桃の暁色、柳の青の美しい彩に加え春霏がかかる景観に心から酔いしれ、詩を詠ずる心地よさが歌いあげられている。連作によって、後ろに続く詩では自然豊かな椿の花咲く山房での楽しい歌会の風情が持ち込まれる。

冬柏満山花自紅	一溪深处訪詩翁	徑廻崖腹行望海	亭占林梢坐聽風
春月照軒姑代燭	主人煎茗不須僮	更欄唱和哄然笑	声在歸雲搖曳中
白髮賞春共可憐	紅情奈似女兒牽	方微醉處花同笑	最苦吟時僮獨眠
向晚桃村留曉色	帶風柳塢尚晴煙	祇應長句縱今日	遮莫狂名身後伝

九萬一に宛てた漢詩では首聯の「共可憐」が「茲向憐」となっている。春の華やいだ若い息吹に満ちる景観とは相対して、老いた自分に対する憐憫の情に気持ちが向いてゆく様子がはっきりと示される。

さて、九萬一に送った「園中口占」の詩は、増蔵に送った漢詩稿では同じ「園中口占」という題名は存在するが、全く違う作品であることをここに示す。

新園雨霧百芳伸
偏喜郊居坐遇春
花信從來向他問
今年卻欲告都人

この「園中口占」は昭和2年に転居した荻窪の庭を指し、郊外のために、自然も多く、今まで暮らしていた都会とは違って、今年は春の花の訪れを人から何うのではなく、反対に春の訪れを都会の人に告げようと思う。と言った内容である。確かに、鎌倉の冬柏山房は山を登っていったところにあるため

に、その名の通りまさに「山房」であるから、それを意識したものなのであろうか。

さて、上記の増蔵に送った「鎌倉冬柏山房小集呈主人二首」はその後、昭和8年12月28日「冬柏」第5巻第1号に「冬柏山房小集席上作」として、第一連の「冬柏満山花自紅…」だけが切り離されて掲載されている。つまり、九萬一に添削を求めた漢詩の方は掲載を見送っているのである。九萬一がどのような添削をしたのかは、その資料が見つからないことから、知ることができないが、寛としては、「冬柏」に掲載するために納得のいく作品として推敲成し得てはいなかったのか、または、掲載紙面の都合で、二者択一して、掲載を見送ったものと推測される。

そして、「冬柏山房」を題材に寛は昭和3年4月16日「国民新聞」で、「冬柏山房抄」10首を詠んでいる。

君が廬は人のたくみを施さず古りたる山に椿はなさく
廬の前の松の下路冬柏おつ主人も我も行かで佇む
山にても風の吹く日は胸さわぐ椿の花の荒く散るため
くれなゐに冬柏ちるなり山風も我が心より吹くけしきかな
山の庵木末に海を近く見て風を聞くにも倦む心無し
軒近く垂るるひと枝の若葉よりいとやはらかき夕暮の山
身は老いて妙なる歌を成し難し椿の花を君が手に置く
山の空ときに曇れど静かなる心の月は君が廬に満つ
世に住めば我が恥多し冬柏さく山の主人と風を聴かまし
帰り路の車の窓の灯の色も扇が谷と椿とぞ見る

増蔵に送った「鎌倉冬柏山房小集呈主人二首」で示された景色と同様の山から海を眺望できる、椿咲く山荘の風を感じる情景が表現されている。

四、まとめ～与謝野寛と漢詩

そもそも、与謝野寛の文芸作品の入り口は、父の与謝野礼巖から教えられた漢詩を成すことであった。その漢詩作品の投稿は寛12歳、明治17年11月「海内詩媒」29集、「秋江晚望」から始まった（その頃は安藤家に養子として入っていたため、澄軒逸史安藤寛と名乗っている）。その後、明治22年6月「海内詩媒」134集までは漢詩の投稿が続く。この間に、大阪・堺の高木秋水の漢学塾に通うなど漢学全般の研鑽を積んでいる。明治22年以降は圧倒的に漢詩の作品が減る。

このような中で、渡韓し、出会ったのが堀口九萬一なのである。九萬一とは、詩友として、作品発表という目的以外の、友人としての関わりを楽しみにしていたようである。従って、九萬一と成していた漢詩の全容は詩稿が出現する都度、今後も明らかになるものと思われる。

大正11年3月に新詩社の雑誌「明星」は復刊を果たし、寛は「日本語原考」の連載を始めている。これは、元号の研究を行っていた森鷗外の影響とも考えられる。ところが、同年7月に鷗外が没し、鷗外の「元号考」の研究も道半ばとなってしまった（この鷗外の仕事を引き継いだのが吉田増蔵である）。寛も鷗外の研究を自分なりに引き継ぐ意識で、以降も「日本語原考」を執筆し続けている。特に、寛の提唱した「つばき」は「冬柏」をはじめとする。という説は吉田増蔵も讀している。それは前述の『与謝野寛遺稿歌集』の「序」に、

若し夫れ語原考の新説に至りては冬柏の紙上に発表せるもの創見確説枚挙に遑あらず。而して国語

のつばきを以て冬柏の漢音より来れるものと為せるは万人の首肯する所なるべし。君亦之を以て其の機関雑誌に名くるに至れるは蓋し会心の説なるべし。

このように「冬柏」にかけた寛の情熱は同人や文芸家には周知となり、昭和4年12月、晶子五十の誕生記念の書齋「冬柏亭」と名付けることとなったし、それ以前には、新詩社同人で実業家の内山英保が鎌倉に「冬柏山房」を成した。このような寛の研究のこだわりが、「明星」の後継雑誌を「冬柏」と定める背景となった。つまり、漢学を基礎とした学問に寛の意識は高まっていたと言えるのである。加えて、昭和2年に荻窪に転居したことは、漢詩の創作意欲を刺激した。そのような中であって、中国に渡って実際に大陸を見たいという希望が大きくなり、旧知の満鉄の古澤幸吉の導きもあって、満蒙の旅行が叶ったのであった。そしてその旅詠も、漢詩で表している。『満蒙遊記』にもその一部が採録されている。

満蒙旅行前後に特に強い漢詩志向のあった寛のことは周知であったし、吉田増蔵や、堀口九萬一との関わりも周知のことであった。だからこそ、吉田増蔵が寛の遺稿集の序を識すにふさわしい、つまり、寛が喜ぶであろうと考えたのであろう。

寛の漢詩は妻の晶子の短歌作品に比べたら、まだ研究も、資料の収集も途上である。従って、世に現れた資料は丁寧に研究していかなければならない。

注

- (1) 「見える推敲、貴重な資料」2022年6月2日「神奈川新聞」15面、イマカナ「与謝野鉄幹の書簡から未発表の漢詩2首の草稿 川崎市の郵趣家、松本憲さんが入手」神奈川新聞情報サイト <https://imakana.kanaloco.jp/article/entry-462592.html> (2022年11月18日現在)
- (2) 与謝野寛は本名。与謝野鉄幹は雅号。
- (3) 2021年12月23日松本憲氏より直接お話を伺う。
- (4) 与謝野光『晶子と寛の思い出』思文閣出版 平成3年9月
- (5) 逸見久美蔵 渡辺湖畔書簡 封筒がないために差し出し年は不明であるが、文章の内容から昭和3年と推定される。
- (6) 逸見久美蔵 吉田増蔵書簡
- (7) 逸見久美蔵 吉田増蔵書簡
- (8) 『与謝野鉄幹漢詩全釈』平成27年6月明治書院
- (9) 鎌倉文学館企画展「冬柏山房に集った文人たち」2015年3月

参考文献

鉄幹晶子全集刊行会『鉄幹晶子全集』全巻 平成13年12月～令和3年5月 勉誠出版
 逸見久美『新版評伝与謝野寛晶子』1～3 2007年8月 八木書店
 逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成』1～4 2002年12月～2003年7月 八木書店
 濱久雄『与謝野鉄幹漢詩全釈』平成27年6月 明治書院